

## 《今昔物語集》中震旦之界線——以卷十第三十五話〈国王、造百丈石率堵婆擬殺工語〉為主

蔡嘉琪\*

### 摘要

《今昔物語集》震旦部卷十收錄了四十則故事，展現了編者欲道盡中國國史的編輯意識。然而到了後半的第三十一話起，就跨越了震旦的界線，出現了幾則充滿異國元素的故事。先行研究指出，這是由於本卷敘述的對象除了震旦之外，震旦周邊的地區亦涵蓋在內之故。第三十五話〈国王、造百丈石率堵婆擬殺工語〉是一則帶有印度元素的作品，描述一名奉國王之命建造卒堵婆的石匠，面臨危難之際，藉著自身的機智以及夫婦之間的羈絆死裡逃生的故事。本文出處不詳，除了漢譯佛經《大莊嚴論經》第十五卷第八十四段，不見與其類似或相關的作品。編者為了將充滿異國元素的故事收錄於卷十之中，運用了包括設定人物與背景、調整結構、轉移主旨等編輯手法。本文以〈国王、造百丈石率堵婆擬殺工語〉為主，對照《大莊嚴論經》的內容，檢視編輯手法之運用，盼能進一步探討卷十的編輯過程。

關鍵詞：《今昔物語集》、《大莊嚴論經》、編輯意識、震旦、界線

---

\*世新大學日本語文學系副教授

# 『今昔物語集』における震旦の境界線—卷十 第三十五話「国王、造百丈石率堵婆擬殺工 語」を中心に

蔡嘉琪\*

## 要旨

『今昔物語集』震旦部の卷十には、四十話が連なっており、中国の国史を語り尽くそうと思う志向が現れている。しかし、卷の後半になると、第三十一話をはじめとして、震旦という地域の境界線を逸脱しており、異国要素が際立った数話が並べられている。それは震旦のみに焦点を絞るのではなく、震旦及びその周辺の世界も視野に入れようとしたからだ、と、先行研究に指摘されている。卷十第三十五話「国王、造百丈石率堵婆擬殺工語」は天竺の要素が強い一話である。ある石工が国王の命令に従い、卒塔婆を造る。石工はその危機に瀕し、機転と心の通じ合った夫婦のきずなによって、一命を取りとめるという内容である。この一話は出典が不明で、類話や関連作品も見当たらない。漢訳仏典『大莊嚴論経』第十五卷の八十四段が原拠と指摘されている。卷十においては、異国説話を収録するために、人物と背景の設定、枠組みの調整、主旨の転移など、様々な編集方法が使われている。本稿では『大莊嚴論経』に照らし合わせながら、第三十五話を検討し、その編集手法を検証するとともに、卷十の編集事情を明らかにしたい。

キーワード：『今昔物語集』、『大莊嚴論経』、編集意識、震旦、境界線

---

\*世新大学日本語学科准教授

## 1. はじめに

天竺、震旦、本朝において、三部構成、王法仏法相依論、二話連想様式、首尾一貫の形など、様々なこだわりを根底に、『今昔物語集』（以下『今昔』と略す）は編纂されている。ところが、三国意識と自国意識の軋轢、依拠資料の事情を含め、編者の意気込みとは裏腹に、編纂過程が難航し、ところどころに破綻が生じてしまう。震旦部の中に、一卷で中国という国の歴史を語り尽くそうという編集意識が、「国史」という巻名に存分に現れている。だが、資料収集に限界があり、結局その目的が果たせたとはいえない<sup>1</sup>。組織重視の編集方針が読み取れるが、様々な事情によって、『今昔』に多くの齟齬が存在している。

例えば、卷十において、「二国互挑合戦語第三十一」をはじめとして、巻の後半に震旦という境界線から逸脱し始め、異国的な要素の際立った説話が集まっている。ここには五話が連なっており、「嫗毎日見卒堵婆付血語第三十六」に至っては、また震旦の枠内に再び呼び返される。異国要素が交じり合うこれらの数話は同話や類話が少ないため、原拠の特定が難しい。従来、『今昔』の研究史ではこの話群に触れることが少なく、研究成果も限られている。しかし、このような全体にそぐわない作品を、様々な工夫をしてまで収録する、という編集意識を見過ごすわけにはいかないと思われる。法則や基準に合わないものこそ、ある意味で編集意識の表れがあるからだ。とすればこの点に、編集意識が表れているのみならず、根底的な思考も補完できるのではないだろうか。

第三十五話「国王、造百丈石率堵婆擬殺工語」は一連の異国説話の中の一つである。機転がきき、心の通じ合った夫婦のきずなに救われた石工を主人公とする。彼は百丈の卒塔婆を造るという国王の命令に従い、作っていた。卒塔婆の完成を目の前に、他国へ行ってこれ以上立派な卒塔婆を造らせないように、国王は石工を殺すことを命じる。そこで卒塔婆から下りられないため、足場が取り外されてしまう。だが石工は、卒塔婆の下にいる妻と力を合わせて、ようやく卒塔婆から降りて、逃げ去った。この第三十五話の出典は不明で、類話や関連作品も見出せない。原拠は漢訳仏典『大莊嚴論経』第十五卷の八十四段であることが定説となる。『今昔』の卷十の後半において、異国説話を収録するために、様々な編集手法を駆使している。本稿では『大莊嚴論経』の本文に照らし合わせながら、第三十五話を検討し、その編集手法の使用を検証するとともに、震旦部卷十の編集事情も考察したい。

---

<sup>1</sup> 震旦部卷十の編集に際しては、手元の資料が限られているため、それらの資料をやりくりして、なんとか四十話が集められ一卷となるという。小峯和明（1985）、宮田尚（1993）を参照。

## 2. 先行研究

ここで、まず話の梗概を抑えておく。「国王、造百丈石率堵婆擬殺工語」では、震旦の国王がある石工に百丈の卒塔婆を造らせ、まもなく完成を迎えるところの出来事である。国王は喜ぶ一方で、例の石工が他国に行って、もっと立派な卒塔婆を造ったらと心配せずにはいられない。そして、石工が卒塔婆の上にいるうちに、下の足場をばらばらに取り外した。石工は目も及ばず声も届かぬ高いところにいるので、どうすることもできず、ぼんやりしていた。ただ、妻がこのことを聞いたら、必ず来ると信じている。そして、石工の思ったとおり、妻がそのことを聞き、すぐ卒塔婆の下に駆けつけてきた。だが、その周りを回るだけでなすすべがない。妻は夫のことをそのまま何もせず死ぬような人ではない、きっと何かいい方法を思い付くに違いないと確信している。妻の見込み通り、卒塔婆の上にいる夫の石工が着ていた服を脱ぎ、それを裂いてひもを作って、つなぎ合わせたものを下に垂らす。卒塔婆を回っていた妻は、それを見るやいなや家へ帰って、紡いでおいた糸を持ってきて、夫が垂らした紐に糸に結び付ける。このように紐を上下しているうちに、何本もの細い糸が結び合わさった太い縄になり、石工はその縄につかまって下に下りることができ逃げていった、という物語である。

「国王、造百丈石率堵婆擬殺工語」を中心とした論考は、管見では極めて数が少ない。第三十五話は、『大莊嚴論経』に由来した天竺種の話という意見が定着されている。研究者はこの一話に対して関心が薄く、主に国史卷の配列を中心に述べて、僅か数行で片付けるのがほとんどである。卷十の配置について、主に三つの意見に分かれている。宮田尚（1993）は第二十八話から第四十話を「教訓譚」と命名し、その中で「歴史直結できない」と「王名が示されていない」ことの二つの共通要素を挙げて、第二十八話から第三十五話を「王名未詳譚」と定義する。王名未詳である理由は、これらの話が王の失敗を述べるものであるため、おそらく、『今昔』の前の時代で、王名はすでに消されていた可能性を指摘する。それに対し、国東文麿（1962）と森正人（1986）は共通要素がないため、分類していない。なお、小峯和明（1985）、前田雅之（1999）川鶴進一（2003）は国王と国家との関連性に目を付け、「国王・国家」関係話と呼んでいる。また、池上洵一（2001）は第二十八話から第三十五話は王だけでなく、「王・后」に関する話としている。

ところが、その中に、周縁性と仏法性に注目し、特に取り立てて論じる研究者がいる。前田（1999）は第二十八話から第三十五話を「国王関係話群」と名付け、巻末に集中される一連の国王関係話群に注目し、三点ほど留意に値するところを取り上げる。まずは、王名未詳という特徴で共通している点である。次に、第二十八、三十四、三十五の三話が仏法に触れた話という点である。最

後に、「震旦ニ二ノ国有ケリ」(第三十一話)と「震旦ノ北ニ□□ト云フ大ナル国有リ」(第三十三話)、この二話は冒頭部から、事件が起きたのは震旦ではなく、その周縁に位置する国であるという点である。以上の特徴からは、「周縁国家であっても、仏国土であること」が示されており、「震旦世界の中心と周縁の叙述を志向」という卷十の編集意識が伺える、と前田は述べている(p.166)。また、竹村信治(2012)が、『今昔』においては朝鮮半島や胡国など震旦に接する地域をも「震旦の版図」に入れられる、と補足している。

以上、第三十五話に触れた先行研究を概観した。これらの先行研究での指摘を見ても、第三十五話がインド種の話材を使用し、震旦部に収めることには違和感を感じさせる。震旦と隣接しているとは言いつつも、『今昔』においては震旦とは分かれており、天竺の部が分立されているにもかかわらず、第三十五話は、天竺部に収録されるのではなく、あえて震旦の出来事として紹介される。この理由は不明である。そこで、第三十一、三十二、三十四話を考察した結果に基づいて、第三十五話の編集手法の検証を行いたい。

### 3. 異国説話の編集手法

第三十五話の原拠と見なされる『大莊嚴論経』は、『大莊嚴経』、『大莊嚴論』、『莊嚴論』とも呼ばれ、インドの馬鳴によって書かれ、中国六朝時代の鳩摩羅什が漢訳した仏典である<sup>2</sup>。全十五巻から成り立ち、釈迦及びその弟子が求道についての話が九十話収められている。第三十五話との異同を検証するため、物語の部分を以下に引用する。

復次、我昔曾聞、有一國中施設石柱極為高大、除去梯陁櫺櫺繩索、置彼工匠在於柱頭。何以故？彼若存活、或更餘處造立石柱、使勝於此。時彼石匠親族宗眷、於其夜中集聚柱邊、而語之言：「汝今云何可得下耶？」爾時石匠多諸方便、即擲衣縷垂二縷綫至於柱下。其諸宗眷尋以羸綫繫彼衣縷、匠即挽取既至於上、手捉羸綫語諸親族：「汝等今者更可繫著小羸繩索。」彼諸親族即隨其語、如是展轉、最後得繫羸大繩索。爾時石匠尋繩來下。

物語に当たる「長行」の後ろに、「偈頌」という教理をほめたたえる韻文の部分が連なる。「偈頌」は「偈」とも略し、四字、五字または七字をもって一句として、四句から成るものが多い。『大莊嚴論経』は五字の六句という形でできている。確かに物語の内容は『今昔』と類似しているが、異同も見受けられる。以下、第三十五話を『大莊嚴論経』に照らし合わせ、その間の異同を取り上げ、人物と背景の設定、枠組みの調整、主旨の転移などの編集手法の使用

<sup>2</sup> 馬鳴はアシュバゴーシャ Aśvaghoṣa の漢訳名で、100年ころインドの仏教界の巨匠であり、詩人、文学者でもある。『大莊嚴論経』は鳩摩羅什(A.D.344-413)によって漢訳される。japanknowledge『世界大百科事典』、『仏光大辞典』を参照。

を検証する。

### 3.1 人物と背景の設定

『大莊嚴論経』の冒頭部に「復次、我昔曾聞」から述べており、人づてに聞いたという形で語り始める。次に、「有一国中施設石柱極為高大、除去梯陞櫺櫺繩索、置彼工匠在於柱頭。何以故？彼若存活、或更餘處造立石柱、使勝於此。」と述べているが、石工が下りられるものを外した人物、また問答する相手は誰なのかは明らかにされていない。そして、「時彼石匠親族宗眷、於其夜中集聚柱邊、而語之言：『汝今云何可得下耶？』」と家族や親類が夜中に石柱の周りに集まり、「どうやって下りられるか」と石工に聞く。それから、石工が知恵を生かし、石柱の下の「親族宗眷」に指示を出し、双方が力を合わせて、ようやく石工が石柱の上から下りられる。『大莊嚴論経』において、石工を中心に、「親族宗眷」とのやりとりに重点が置かれることが明らかになる。そして、背景は「国中」と設定されているが、全文をとおして、「王」という言葉が使われていない。「彼若存活、或更餘處造立石柱、使勝於此。」という思惑で、「除去梯陞櫺櫺繩索、置彼工匠在於柱頭。」という行為を取った人物は、「国」における最高権力者である国王と連想し難くない。王にかかわる表現を使わなくても、内容を理解する妨げにならないだろう。

ここで、『今昔』の場合を検証する。まず、「国王、造百丈石率堵婆擬殺工語」という題名から、「国王」を強く意識していることが分かる。次に、冒頭部を引用し、事件の人物と背景を確かめよう。

今昔、震旦ノ□□代ニ、百丈ノ石率堵婆ヲ造ル工有ケリ。

其ノ時ノ国王、其ノ工ヲ以テ百丈ノ石率堵婆ヲ造リ給ヒケル間ニ、既ニ造リ畢テ、国王ノ思ヒ給ヒケル様、「我レ、此ノ石卒堵婆ヲ思ヒノ如ク造リ畢ヌ。極テ喜ブ所也。而ルニ、此ノ工、他ノ国ニモ行テ、此ノ卒堵婆ヲヤ起テムト為ラム。然レバ、此ノ工ヲ速ニ殺シテム」ト思ヒ得給ヒテ、此ノ工ノ未ダ卒都婆ノ上ニ有ル時ニ、不下サズシテ、麻柱ヲ一度ニハラ／＼ト令壊メツ (p.371)。

引用のように、物語の背景は震旦であることを強調しているが、王朝名に該当する部分が埋められていない。これは意識的欠字という指摘が小峯にある。それから、視点は国王に移し、彼はなぜそのような行動を取ったのか、その考えの一部始終を詳しく釈明している。説明が終わると、視点はまた主人公の石工に戻る。そして、話末評の部分まで、国王は非議される対象として再登場する。

もう一つ注目すべきなのは、『大莊嚴論経』において、石工に手を貸しているのは「親族宗眷」であるのに対し、『今昔』では、卒塔婆の下に駆けつけて

きたのは妻であった。この差異は物語の枠組み及び主旨を大きく左右するものであり、後に詳しく論じる。このように、国という要素は『大莊嚴論経』と『今昔』二話に共通されている。だが、『今昔』には題名、冒頭部、話末評において国王のことを強調することによって、作品において、国王に焦点を当てる意識がうかがえるのではないか。また、『大莊嚴論経』では「石柱」であるが、『今昔』では、題名、物語部、話末評に、「石率堵婆」、「石卒堵婆」、「卒都婆」と表現は異なるものの、石塔を卒塔婆に入れ替える。卒塔婆はインドの発祥で、もともとは釈迦の遺骨を納める塔を指す。中国を経由して、日本では聖徳太子の時代に伝わってきた。石だけでなく、仏舎利や経典などを納める木塔も卒塔婆と呼ばれている<sup>3</sup>。ところが、第三十五話に石柱を卒塔婆に入れ替えることは、天竺や仏法のイメージというより、次話「嫗毎日見卒堵婆付血語第三十六」を想起させる。卒塔婆をもって、第三十五話と第三十六話が繋げる。要するに、この二話の連想契機が明らかになった。

### 3.2 枠組みの調整

内容から見ると、『今昔』と『大莊嚴論経』と石工が危機から逃れるというあらすじは共通している。また、流れも大きな違いがないように見える。ただ、前節にも触れたとおり、『大莊嚴論経』において、石工に手を貸しているのは「親族宗眷」である。夜中石柱の周りに集まってきた「親族宗眷」が、「汝今云何可得下耶？」と尋ねる。すると、石柱の上にいる石工が親族宗眷に指示を出し、やっと脱出することができる。それに対し、『今昔』には、石工が造ったのは石柱ではなく、「卒塔婆」である。また、卒塔婆の下にいるのは夫のことを信じ、支えている妻である。

『大莊嚴論経』の長行は、散文で述べる部分と教理を解き明かす部分、大きく二つに分かれる。後半には、散文における物事の例えが悉く説明されている。「言親族者喩声聞衆」という一言は、親族宗眷を「声聞衆」、すなわち仏の教えを聞き、悟りを目指す出家の修行者のことに例える<sup>4</sup>。一方、『今昔』には、夫婦二人の間のやりとりとして、次のように妻と夫各自の考えを述べている。

(前略) 工可下ルベキ様モ無クテ、「奇異也」ト思テ、「卒堵婆ノ上ニ徒ニ居テ為方無シ。我ガ妻子共、然リトモ、此ノ事ヲ聞ツラム。聞テハ必ず来テ見ツラム。故無クシテ我レ死ナムズラムトハ思ハジ物ヲ」ト思フト云ヘドモ、音ヲ通ス程ナラバコソハ呼バ、メ、目モ不及ズ、音モ不通ヌ程ナレバ、カモ不及デ居タリ。

而ル間、此ノ工ノ妻子共、此ノ事ヲ聞テ、卒堵婆ノ本ニ行テ、通り行テ

<sup>3</sup> 仏学術語辞典、仏典辞書数位検索系統を参照。

<sup>4</sup> 『WEB版新纂浄土宗大辞典』「声聞」条を参照。

見レドモ、更ニ可為キ方無シ。妻ノ思ハク、「然リトモ、我ガ夫ハ可為キ方無クテハ不死ナジ者ヲ。構ヘ思フ事有ラム者ヲ」ト、憑ミ思テ迤リ行テ見ルニ、工、上ニ有テ、着タル衣ヲ皆解テ、亦、斫テ糸ニ成シツ (pp.371-372)。

石工は完成寸前の「百丈ノ石率堵婆」の上に残される。百丈を換算すると三百メートルの高さで、そこは目にも見えず声も届かぬ高さなので、石工は立ち往生の状態に陥る。冒頭部に事件発生の王朝名が欠落しているわりには、「目モ不及ズ、音モ不通ヌ程」と、まことしやかに卒塔婆の高さを示している。ここからは、信憑性を高めるために、整合性にこだわる編者姿勢がうかがえるのではないか。

顔を合わせなくても、石工は妻が絶対卒塔婆に来ると確信している。案の定、そのことを耳にした妻はただちに卒塔婆の周りに駆けつけてきた。それだけでなく、彼女も夫がきっと脱出策を思い付くに違いないと信じる。このように、夫婦の間の強い信頼関係が強調されており、これは物語の主旨に大きな影響を与えるものである。

### 3.3 主旨の転移

一般的には、説話の内容を述べる物語部に対し、話末評は「教訓の提示や主題の確認、また話題についてのコメント」を出し、話を完結するという役割を果たしている（竹村、2003）。だがそれは『今昔』の場合には当てはまらない叙述である。『今昔』の場合、話末評は物語部と不整合の話が多く存在しており、特徴の一つとして捉えられている。ただし、『今昔』の物語部と話末評の不整合な叙述は、一般的な話末評への期待に背くというより、『今昔』の話末評から、むしろ編集事情や編集意識が読み解ける切り口だと考えられている。第三十五話の主旨を確認するため、ここで、まず『大莊嚴論経』の教えを見よう。

言石柱者喩於生死、梯陞櫺欏喩過去佛已滅之法、言親族者喩声聞衆、言衣縷者喩過去佛定之與慧、言擿衣者喩觀欲過去味等法。縷從上下者喩於信心、繫羸縷者喩近善友得於多聞、細繩者多聞縷、復懸持戒縷、持戒縷懸禪定縷、禪定縷懸智慧繩、以是羸繩堅牢。繫者喩縛生死、從上下者喩下生死柱。

「以信為縷綫、多聞及持戒、

猶如彼羸縷、戒定為小繩、

智慧為羸繩、生死柱來下。」

引用されるのは長行の後半部分と偈頌の内容である。長行の後半には前半に触れた人やものはすべて例えとして用いられる。石柱を生死、梯陞（階段）と

櫓（足場）を過去の仏法、親族を仏の教えを聞いて悟りを目指す出家の修行者のこと、服の細い糸を定（心の統一）と知恵、糸をつまむのは仏の教えを考へることに例えている。そして、上から垂れ下がった細い糸は信仰の心であり、太い糸を繋ぐのは仏の教えなどの善知識を聞き、心にとどめおくことを指す。また、細い糸は多聞の糸であり、それに持戒（戒を堅く守る）の糸、禪定（無念無想の境地）の糸、さらに智慧の繩を繋ぎ合わせることによって、太くて丈夫な繩が出来上がる。最後に、その太い繩を体に結び、石柱の上から下りるのは、生死から解放されるということわりを表す。また、前述した内容を六句の偈頌にまとめる。結論から言えば、信仰の心を持ち、善知識の導きにしがうことが修行の基本でもある。戒を堅く守るのは細い糸のように、それを守り続けられれば、知恵をつけることができる。知恵とは、細い糸を何本も結んでいくと太い繩になるように、知恵というものはついていくものなのだ。そうしていくと人間は、いつか必ず生死の束縛から解放できる。

では、『今昔』第三十五話がどのような結論を導くか引き続き考察を進めたい。そもそも仏教では追善供養の目的によって、卒塔婆が建てられるものの、石工に百丈の高い卒塔婆を建てさせる国王は、その本来の目的を忘れてしまう。王としての「威信を誇示する」<sup>5</sup>ために、我欲に支配され、石工が他国へ行ってもっと高い卒塔婆を建てさせないように、殺意が芽生える。冒頭に触れた国王は、話末評に再び登場し、今度は世間の非難的となる。物語部の後ろに「彼ノ卒塔婆造り給ヒケム国王、功德得給ヒケムヤ。世挙テ、此ノ事ヲ謗ケムトナム語り伝ヘタルトヤ。」という話末評が付け加えられるのである（p.372）。

正しい方法を使って、正しい方向へ向かって、ひたすら修行し続けられれば、生死の束縛から解放されることができるといのが『大莊嚴論経』の主旨とされる。それにひきかえ、『今昔』においては、冒頭部に呼応するために、話末評に卒塔婆を建てる功德を求める国王に視点に戻る。しかし、かえって夫婦のきずなど石工の機転に力点を置いて述べる物語部には釣り合わない話末評になってしまう。さらに石柱を卒塔婆に入れ替え、仏典説話の本質を持ちつつ、次話との連想契機が生まれる。そして、「国王」の作為を強調することによって、前話「聖人犯后蒙国王咎成天狗語第三十四」との関連性を持たせるようになる。物語部との食い違いが存在しても、冒頭部と話末評に力を入れて呼応させて、話が終わる。たとえ、若干の不足があっても、国王の役割を引き立てることをとおし、前後の作品と円滑につながることができるため、編者にとって納得のできる結果となるだろう。

<sup>5</sup> 小峯和明校注（1999）テキストの脚注より引用。

## 4. おわりに

以上のように、『大莊嚴論経』第十五卷八十四段は、仏法の修行に励むということわりを導く話である。『今昔』は、原拠には特に触れていない国王という人物を際立たせることによって、これまでの数話と同じ要素を持たせ、『今昔』の構造上の特徴といえる二話連想様式や話群が共通要素でまとめることができ、この話が『今昔』の構造にもあう。なお、『今昔』においては石柱を卒塔婆に、親族宗眷を妻に入れ替え、話の人物と背景を変更する。次に、物語の流れは変えないまま、人物と背景の変更に合わせて、「百丈ノ石率堵婆」のような具体的な情報を加える。この話は、話の細部を補足修正を行いつつも、「夫婦のきずな」という要素を改めて強調していく。最後に、話末評をとおして、主眼を国王に戻して、その悪徳ぶりに注目し、話の整合性を高めるとともに、この一連の異国話群の組織を固めていこうとしている。

ここまでの編集手法の検証により話の創作方法、主題は明確になったが、編集手法を検証してもなお解明されていない問題が残っている。それは震旦の周縁に所在している天竺関連の話が天竺部ではなく、震旦部に収録される理由である。先行研究においては小峯（1985）と前田（1999）が第三十五話の仏法要素に注目し、中国とその周縁国家に仏法が広まる「仏国土」だと指摘している。

「仏国土」という認識のもとにこの話を取り入れたので、天竺種の話材と知りつつも、震旦の国史話として編纂されるという<sup>6</sup>。ところが、『今昔』には、天竺とは「仏陀誕生の地、かつ仏陀が切り開いた仏国土」、つまり単に仏教の影響を受ける地域という認識ではなく、さらにそれを超え、仏法の発祥の地として認識されている。よって、中国の「周縁国家」として捉えることはできないと思われる。それに、卒塔婆を除いて、第三十五話は仏法の要素はほかに見当たらない。仏国土の証明というより、むしろ物語部には心が通じ合う夫婦の強いきずなと信頼関係、冒頭部と話末評には国王に対する非難、この二点が強調されている。

なお、巻十の編纂にあたって、直接の典拠として、和文資料の『俊頼髓脳』が取り上げられる。ほかには『宇治拾遺物語』と同源のもの、『注好選』などとかかわっているという指摘も小峯（1985）、宮田（1993）によってなされている。だが、これらの資料には、第三十五話とかかわりのあるものが見当たらないし、ほかに類似する作品も見受けられない。管見では編者は今では散佚したほかの資料を参照し、編者独自の加筆により第三十五話が出来上がった可能

<sup>6</sup> 前田（1999）は第二十八、三十四、三十五に注目して、この三話とは仏法にかかわる話で、震旦の周縁でも「仏国土である」と指摘している。そして、小峯（1985）は巻十は天竺部の巻五と同じ位相で、これらの数話が「中国国土の創設と展開を物語る建国話として最も巻主題にふさわしい。天竺種とされる話材をあえて用いた」という理由を述べている。

性も浮上している<sup>7</sup>。『大莊嚴論経』がいつ日本に伝来したかは不明だが、四世紀に漢訳され、遣隋使、遣唐使の手によって日本に伝来したとも考えられる。もし『今昔』卷十にほかの参照資料があるとしたら、それは震旦部ほかの四巻の編集に使われる『三宝感応要略録』、『冥報記』、『弘賛法華伝』、『孝子伝』のほか、仏典関連の資料であろう。

また、編集の順番から考えると、第二十八話から第三十五話の国王国家話群と、後ろに連なる奇異話群の境に配置される第三十六話の「姫毎日見卒堵婆付血語」があるわけだが、すでに第三十五話に先立って第三十六話は入れられており、後に第三十五話の「国王、造百丈石率堵婆擬殺工語」に「国王」、「卒堵婆」などの要素を入れた話として完成され、収録されたと推定できるだろう<sup>8</sup>。その一方、たとえ天竺種の話材だと分かっても、卷十に収めるようと、天竺の色を薄める編集意識も読み取れるだろう。胡国と朝鮮とは異なっており、少なくとも天竺は震旦の境界線の中に収まっていないのではないかと考えられる。

#### 【付記】

本稿は中華民国科技部專題研究計画「《今昔物語集》的解構性閱讀」（『今昔物語集』における脱構築の読み）（MOST 109-2410-H-128-014-）による成果である。

## テキスト

小峯和明校注（1999）『今昔物語集』二（新日本古典文学大系 34）東京：岩波書店。

『大莊嚴論経』（漢籍全文、佛典経録資料庫）<[http://jinglu.cbeta.org/cgi-bin/jl\\_detail.pl?lang=&sid=zrmqm](http://jinglu.cbeta.org/cgi-bin/jl_detail.pl?lang=&sid=zrmqm)>（2021年4月3日検索）

<sup>7</sup> 卷十「二国互挑合戦語第三十一」を検証し、『今昔』と原典との間に今では散佚されたものが介在している可能性があるという（蔡、2019）。

<sup>8</sup> 第三十六話は国家要素及び奇異要素両方を兼ね備えたことで、二つの話群の間に橋渡しの役割を果たせる理想的な作品とされる。ここから、卷十の編集の早い段階で第三十六話の配置位置が決められていたと考えてもよいだろう（蔡、2020）。

## 参考文献

- 池上洵一（2001）『今昔物語集の研究』（池上洵一著作集第一巻）、大阪：和泉書院。
- 池上洵一（2008）『池上著作集第四巻』、大阪：和泉書院。
- 国東文麿（1962）『今昔物語集成立考』、東京：早稲田大学出版部。
- 小峯和明（1985）『今昔物語集の形成と構造』、東京：笠間書院。
- 小峯和明編（2003）『今昔物語集を学ぶ人のために』、京都：世界思想社。
- 蔡嘉琪（2019）『今昔物語集』震旦部巻十「二国互挑合戦語第三十一」論——南方熊楠の書き込みを起点として——『日本語日本文学』第48期、pp.67-85。
- 蔡嘉琪（2020）『今昔物語集』震旦部巻十「姫毎日見卒堵婆付血語第卅六」論——陥没伝説の誠め——『台湾日本語文学報』第47期、pp.1-25。
- 竹村信治（2003）「話末評」。小峯和明編『今昔物語集を学ぶ人のために』。京都：世界思想社。pp.305-307。
- 竹村信治（2012）〈他者のことば〉と『今昔物語集』—漂う預言者の未来記—。小峯和明編『東アジアの今昔物語集—翻訳・変成・予言』。東京：勉誠社。pp.26-54。
- 芳賀矢一（1976）『攷證今昔物語集』、東京：富山房。
- 前田雅之（1999）『今昔物語集の世界構想』、東京：笠間書院。
- 宮田尚（1993）『今昔物語集震旦部考』、東京：勉誠社。
- 森正人（1986）『今昔物語集の生成』、大阪：和泉書院。

## データベース

japanknowledge『世界大百科事典』「率都婆」条

<https://japanknowledge.com/psnl/search/basic/?> (2021年5月3日検索)

WEB版新纂浄土宗大辞典「声聞」条

<http://jodoshuzensho.jp/daijiten/index.php/%E5%A3%B0%E8%81%9E>  
(2021年5月3日検索)

慈怡法師編『仏光大辞典』「大莊嚴論経」条

<http://buddhaspace.org/dict/fk/data/%25E5%25A4%25A7%25E8%258E%258A%25E5%259A%25B4%25E7%25B6%2593%25E8%25AB%2596.html>  
(2021年5月3日検索)

仏学術語辞典「率都婆」条

<http://glossaries.dila.edu.tw/search?g=DFB&term=%E7%8E%87%E9%83%BD%E5%A9%86&locale=en> (2020年2月25日検索)

仏典辞書数位検索系統「率堵波」条

<http://140.112.26.229/cyj/index.py?term=%E7%AA%A3%E5%A0%B5%E6%B3%A2> (2020年2月25日検索)

